

撤退田園

いなだそういちろう

稻田宗一郎

2020年夏

小松のカントリーの前の道を東へ向かって走っていた時に、茂は不意に、

——賢一に惣右衛門さんの息子に会ってもらいたい。
と思った。

惣右衛門の家は高山地区にある。惣右衛門の息子は田んぼで作業しているかもしれない。惣右衛門の息子の惣次郎は二年前に東京の仕事を辞め、親父の跡を継いでコメを作っていた。

「賢一、この道を曲がるぞ」

茂がそう言うと賢一は怪訝な顔をした。

「そっちは、JA 本店へ遠回りになる」

「まあ、いいじゃないか。賢一はまだ知らんが、惣右衛門さんの息子

が帰ってきてコメを作っている」

「えっ、惣次郎が戻っている？」

賢一は驚いて、

「惣次郎は東京のIT会社に勤めていたんじゃないのか？」

と言った。

「東京でいろいろあったらしい。惣右衛門さんと惣次郎は昔から家を継ぐ、継がないで大喧嘩をしたことは賢一も知っているだろ」

「そんな事があったな」

「ところが、家に戻り惣次郎がコメを作りたいと惣右衛門さんに言つたらしい。惣右衛門さんは最初はまったく無視していたが、親子なんてわからんもんだ。結局は受け入れて、今じゃ、惣次郎は立派な農業後継者さ」

「コメ作りが親子の関係を修復させたのかな？」

二人を乗せた車は八幡地区の農道をゆっくり走っている。昼下がりの田んぼの中の道は、ただ、道だけが存在し、その道を夏の暑い日差しが照らしているだけだった。

何本かの農道を曲がり惣右衛門の家の前の道に来た時、茂は畦道で草を刈っている惣次郎を見つけた。惣次郎は農協の帽子をかぶり、草刈機を上手に使っていた。

惣次郎は地元の高校を優秀な成績で卒業し、地元のF大学に進学し情報技術を学び、卒業後は東京のIT企業に就職していた。理数系の秀才にありがちな人間関係は苦手といった感じは少しもなく、のんびりした人当たりの良い性格だった。

その性格が認められ、西川に戻ってきてから農協青年部に入り、茂たちと一緒に地域の農業を引っ張っていた。特に、IT技術の知識を活用し、三年前に農協が始めたITを活用した圃場別営農情報管理と業務用のネット販売、SNSを活用した准組合員と都会の消費者向け農協応援団の

技術的なサポートをしていた。

惣次郎は二人を見かけると、オヤッという表情になり、こちらに向けて手を挙げた。

「茂さん、こんちは、賢一さんも一緒ですか？ ちょうどよかった」

「ちょうどよかった？ なんだ、惣次郎？」

「こここの田んぼの稻、少し色が薄くないですか？ 追肥したほうがよいですかね？」

「そうだな、少し薄いな、田植えは何時した」

「ちょっとまってください」

と言って、ポケットにいれてあった小型のタブレット端末をだし、

「田植えは5月23日、3月15日に堆肥を1,000kg、5月5日に有機質N 8%を60kg/10a いれてあります」

「堆肥が1,000kg、田植えが5月23日でN 8%が60kgか、田植えが少し遅かったから、追肥はいらないんじゃないかな」

「そうですか、茂さんが言うなら間違いないですね」

「俺に聞くより惣右衛門さんに聞けよ」

「親父にですか、親父はIT なんてからっきしですからね」

惣次郎はにこやかに笑い賢一に話かけた。

「ところで、賢一さん、今度、農協の青年部に入るんですってね」

賢一はちらと惣次郎をみたが、少し後ろめたさがある自分を感じていた。

惣次郎は賢一の心の動きには全く気が付かずに、

「賢一さん、賢一さんの法人での経験、青年部の皆に教えてやってください」

と元気に言った。

「俺の経験？ ライスランド名島を潰した経験か？」

賢一は自嘲気味に言った。

「それも含めていろんなことです。今の青年部や農協の連中に賢一さんのビジネス経験を植え付けてください。青年部や農協の若手職員はそれを期待しているんです」

惣次郎は若者らしく答えた。

「茂、お前、わざと惣右衛門さんの息子に合わせたな？」

「そんなことはないよ。でもな、惣次郎の言っていた事は本当だ。今「あらふね」のコメは、お前の経験と助言が必要なんだ。大手企業は、上手いことを言って「あらふね」の農業法人に共同出資し、最初はそれなりの価格でコメや果物を買い上げていたが、ここにきて価格を下げ、買い叩き、売らないといったら出資金を引き上げるか、法人を買い取るかのどちらかだ。このままいったら、「あらふね」は農地はバラバラ、組合員の気持ちもバラバラ、地域が崩壊する」

茂の話は宮島が言っていた話の「あらふね」版だった。大手企業は傘下の農業法人に対して締め付けと淘汰を始めていたのだ。

「そうだな、大手はやり方が汚い。俺もP県でやつらのやり方をこの目で見た。市場主義、競争メカニズムだけでは日本の食料と地域は守れない。俺も、これから、茂や惣次郎たちと一緒に地域の農業と農村を身体を張って守っていくよ」

「そうだな、一緒にやっていこう」

茂はしっかりと前を向き、両手でハンドルを握りながら、

「実はな、賢一。今日の役員会でお前の青年部への入部と副部長就任を根回しし、専務たちの反対意見を潰したのは、営農部長の功と次長の昌二なんだ」

「…………」

「今回の俺の青年部への推薦は、お前の他に功と昌二も絡んでいたのか？」

——農協にたてついていた俺をな。これじゃ、やり直さなきゃ、やつ

らにすまん。

賢一は茂に聞こえないように咳き、ただ、青々と育っている田んぼを無言のままジット見つめていた。賢一の目には薄すらと涙が浮かんでいた。

「……………」

「賢一！ 何、ぶつぶつ言ってんだよ、お前、功、昌二、それと「あらふね」の稻がなければ、俺は、今、ここにはいなかったのさ」

茂の声が聞こえた。

おわり